新見公立大学紀要　第37巻
pp. 99－106, 2016

研究ノート

保育者養成課程における子育て支援力の評価に関する研究

－先行研究のレビュー－

三好　年江*

新見公立短期大学幼児教育学科

（2016年11月30日受理）

本研究は，保育者養成課程における子育て支援力の評価に関する先行研究をレビューし，子育て支援力の評価について考察することを目的とする。レビューの対象は，論文検索サイトciniで「子育て支援」「保育者（士）養成」をキーワードに検索された文献および保育者養成校等から発行された報告書等の11件である。レビューの結果，質的な研究が9件，質・量併用の研究が2件であった。質的な研究では，インタビューデーターや記録等を対象に内容分析を行いカテゴリー化して学び等を抽出しているもの，プロセスに注目して，「変容の内容」「学びの要因や背景」を明らかにしているものが見られた。質・量併用の研究では，学びの指標となるチェックリスト等を使用し，実践の前後等の数値を統計的に処理することにより「学び」や「変化」を数量で実証していた。また，質的調査で学びの内容や量的調査との関連を見ていた。子育て支援実習等の成果を適切かつ詳細に評価するためには，一つに，子育て支援力と考えられる具体的な指標を作成し，実践の前後で評価を行う，二つに質的な調査も取り入れ学びのプロセスや要因等を明らかにする。このことにより，喫緊の課題となっている保育者養成課程における子育て支援力育成への取組みに重要な示唆が得られるのではないかと考える。

（キーワード）保育者養成課程，子育て支援力，評価，レビュー

1．はじめに

子育て中の親子を取り巻く環境を見てみると，子どもが豊かに育ち，親が親としての力をつけていく条件が揃っているとは言い難い。特に，近年の少子化や核家族化，都市化，情報化などから生じる，地域機能の低下，子育て家庭の孤立，育児不安などの影響により，子どもの育ちの危うさや親の養育力の低下は社会的問題となっている。

そのような中，保育所や幼稚園等は子育て支援における地域の重要な社会資源として大きな期待を寄せられている。2008年に告示化された保育所保育指針[1]では，「保育所は，入所する子どもを保育するとともに，家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら，入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援を行う役割を担うものである」と保育所の子育て支援に対する役割を明確にしている。幼稚園においても，2008年改訂の幼稚園教育要領[2]に，園庭開放や保護者に対する教育相談や情報提供，保護者同士の交流の機会提供，地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう明記されている。このように，現在は，保育者は子どもの保育，保護者支援に加えて，地域の子育て家庭の「子育ち」「子育て」を支える重要な役割が求められている。

保育者養成校においては，2002年度より「家族援助論」が必修科目として創設され子育て支援について学ぶこととなった。2013年には，「家族援助論」が「家庭支援論」へ，「社会福祉援助技術」が「相談援助」「保育相談支援」へと改変され，子育て支援について学ぶ科目の充実が図られているところである。しかし，これらの科目は講義や演習にとどまっており，子育て支援を実践的に学ぶ「実習」等は義務付けられておらず，現在は，養成校の問題意識等により，様々な取り組みが見られる。

2008年，福井ら[3]により，保育士養成校160校の保育実習担当者等を対象に子育て支援活動に関する調査が行われた。アンケート回答校の約半数が学生参加による子育て支援を実施していた。その内容は「音楽会や劇」「ペープサートや絵本の読み聞かせ」などショー的な要素を持つ活動や製作活動で，主に子どもを対象としたものが多く，活動の「ねらい」や「内容」も様々であった。2012年には，橘ら[4]が関東の公立・私立幼稚園・保育所400園の保育者に対して養成校時代の子育て支援活動への参加の有無や経験した子育て支援活動の内容などについて回想するという方法で，子育て支援活動の実態を明らかにした。結果は，子育て支援活動に参加した者は全体の4割に満たないことや子育て支援活動への参加は4年制大学出身者に多いことであった。どのような参加形態であったかについては，自校での子育て支援活動で，ボランティアが多かった。単位

*連絡先：三好年江　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　新見市西方1263-2

化のされた授業科目にはなっていないことが多く，自主的な課外活動として位置づけられていることが多いことがわかった。実践内容は「親子と自由にかかわった」が6割，「劇やダンス，ペープサート等を披露した」が3割であった。経験を通して学んだことは，親子の関わり方，子育て支援に対する知識が深まったなどが挙げられていた。既述の調査からも，各養成校において様々な取組みが行われていることがわかる。

一方で，これらの取り組みが，将来保育者となる学生の子育て支援力につながっているのかについてはどうであろう。福井ら[3]は，子どもを対象としたショー的な子育て支援活動が多かった調査結果から「子育て支援力」の育成を主眼に置くならば子どもとの関わりなどはもちろんのこと，保護者と関わる力などの育成が大きな課題となると述べている。橘ら[4]は，子育て支援活動における学びや役立ち感等について調査しているものの，養成校時代の回想から抽出されたものであることから適確な把握であるかどうかが疑問であると述べている。

現在，各養成校が取り組んでいる子育て支援活動等が，どのような教育効果を上げているのか検証し実践の質を上げていくことは，保育者に求められている時代のニーズである子育て支援力につながることではないかと考える。

筆者は，2008年，勤務地の大学内に設置された子育て広場Aの運営等に関わっている。地域の親子に開放された親子交流の場であり，大学が地域と協働する子育て支援事業の一つである。学生は，子育て広場Aで親子と自由に関わる自主実習等を行っている。本活動は学生の自主性に任された体験学習である。レポート等の整理から，この経験を通して，学生は子どもの捉え直しをしたり親の理解を深めたりしているという実感はあるものの，どのような効果があったかを実証する研究には至っておらずその必要性を感じている。

そこで，子育て広場Aを実践の場とした「保育者養成課程における子育て支援力育成の評価に関する研究」に先立って，これまで養成校で行われてきた子育て支援力育成に関する取り組みの評価に注目して，先行研究のレビューを行うこととした。

2．研究の目的

養成校における子育て支援力育成に関する評価はどのようになされているのかについて，先行研究をレビューする。

3．研究の方法

論文検索サイトciiniより，保育者（士）養成，子育て支援をキーワードに検索された文献および養成校より発行された子育て支援への取組みに関する報告書等より，学生の子育て支援力育成に対する評価が見られる11件を分析対象とした。具体的には，まず，11件の文献などについて，記述等の内容を分析する質的な研究なのか，数量等で結果をみる量的な研究なのかについて分類を行った（表1・表2）。さらに，表1，表2に示すとおり，①何を材料としたか②誰を対象にしているか③分析の方法④視点（表2のみ）⑤結果などの視点から分析を行った。

4．結果

評価の方法に注目して先行研究を整理したところ，質的調査および量と質を併用した調査の研究に分けられた。

1）質的調査により評価を行った研究

質的な研究9件については，表1に示すとおりである。何を分析の対象にしたかで区分すると「インタビューデーター」を対象としたもの「振り返りやレポート等の記述」を対象としたものが見られた。

（1）インタビューデーターを対象とした研究

2012年，橘ら[4]は，子育て支援活動における学生のかかわりの変容を明らかにすることを目的に，子育て支援活動に参加した学生9名全員に半構造化面接を行っている。その結果，17の概念が生成されたとし，概念の生成要因について考察している。そして，活動回数等が増えるにつれて保護者との関わりの必要性を感じ，積極的に関わりを持ち親子について知ろうとするなど意欲が向上したと述べている。

2011年，竹之下ら[5]は，地域子育て支援ひろばへの実習参加で心理的変化のあった学生，変化のなかった学生等5名について学生のひろば実習体験過程を明確化することを目的に半構造化面接を行った。その結果，演習前後の自己肯定感の高低に関わらず学びが促進されたと述べている。本調査では，量的調査だけでは明確に出来にくかった学生の体験過程の中身が明らかになったと述べ，学びの促進の条件について，有能で理解あるひろばスタッフの介在や座学と実習体験の両輪の学習スタイルを挙げている。課題は，地域子育て支援実習が現行の保育士養成カリキュラムで位置づけられていないことや，子育て支援科目のコンテンツが明確にされていないこと，地域子育て支援研修のプログラム化であると述べている。

（2）振り返りやレポート等の記述を対象とした研究

学生が実習後等に提出する振り返りシートやレポート等の記述を対象として，それらを最終的に取りまとめ内容の整理や分析を行ったもの（以下，内容分析）や，実習終了毎に提出される振り返りシート等の記録の経過を分析する（以下，プロセス分析）研究が見られた。

① 内容分析

内容分析としては，2009年，長谷中[6]は，「地域を基盤

表１．質的な調査研究

	タイトル	著者名	年号	何を材料としたか（分析対象）◎＝プロセスあり				誰を対象にしているか	分析方法	結果
				インタビューデーター	記述					
					日々の記録等	アンケートの自由記述	最終の振り返り			
1	保育者養成校で保育士の専門性を高める試み～地域子育て支援プログラムの一時保育の経験を通した「反省的実践」～	平松紀代子	2014		○			一時保育に参加した学生37名中35名	**内容分析（Text miniing処理）**	①身近なキャンパスで実践するメリット ②一人一人の成長に対する気付き ③母親にかわる心のよりどころとなる経験 ④子どもの力を引き出す関わり ⑤保護者との関わりの中での気付き→子どもの様子を保護者から聴き取ること、子どもの様子を保護者に伝えること、ありのままの保護者を理解することなど保護者と連携して子どもを育もうとする気持ちが育っていった
2	子育て支援活動での学生のかかわりの変容	橋知里・小原敏郎	2012	○				都内私立A大学発達相談支援センターの子育て支援活動に参加した又参加している学生9名（卒業生3名、4年生3名、3年生3名）	**半構造化面接（M－GTA）**	17の概念が生成された⇒概念が生成された要因等について考察している　活動回数や経験年数が増えるにつれて「保護者とかかわることの必要性」を感じ、自分から積極的にかかわりを持ち親子について知ろうとする学生の姿が見出された。
3	「子育て支援」に関する力量形成を目指した保育者養成の試み一子育て広場「あいあい」を通して学生が体感した語りから考察するに関する	多田琴子・三宅茂夫	2011				○	授業「発達理解実習」履修学生	**内容分析（コード化）**	自分自身の学びを価値あるものとして必要感を持って会得していこうとする姿勢が明確になった。保育の価値の質が少しずつ変化していく。企画・運営をすることにより活動内容に関する共通理解の必要性に気付いていった。
4	保育者養成課程における子育て支援事業を通した学生の意識変容	荒木満紀・園川緑、伊藤雅子・今井正江・石井友光	2011			○		保育学生1年38名	**内容分析（Text miniing処理）**	前半期調査では「母親」「うれしかった」「子ども」に関する記述が多かったが、後半期は、「会話」次に「子ども」「うれしかった」の記述度数の順となり、観点の変化が見られた。これは、母親とのコミュニケーションというプレッシャーを克服し冷静に子どもが見られるようになって行くことが示唆された。前半期特半期では「会話」および「個名」が優位な向上を示した。 徐々に冷静に対応することで具体的な「会話」や「個名」について意識できるようになっていくことが示された。
5	学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的変化の質的調査研究～SCAT法導入による実習体験過程の理論的仮説生成の試み～	竹之下典祥・馬見塚珠生	2011	◎				保育ゼミを希望した18名。	**半構造化面接（SCAT法）**	赤ちゃんへの回避感情と子どもへの親和性得点の低下が見られ、赤ちゃんへの接近感情、自尊感情には全体としては有意差が見られなかった。　演習前後での自己効力感の高低に関わらず程度の差はあれ、いずれもが以下の点をこの演習では体験し、学びが促進されていることが明らかになった。①アタッチメント形成過程の参与観察とその体験学習の促進②乳児の成長発達を観察し体験学習を促進など5つの学びが見られた。
6	「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（3）－3年間の継続研究を通してモデルシラバスの提示を行う一	福井逸子・小栗正裕・柴田智世・瀧川光治	2010		○			イベントに参加した学生	**内容分析**	イベント型とひろば型においては、実践における学生の学びが違う。プログラムの有無、子育て支援保育士の存在の有無が、学生の学びの中身に違いをもたらしている。学生の「子育て支援力」育成のためには、理論的な学びだけでなく「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」と「ひろば（サロン）型子育て支援活動」の両方を経験することが必要。保育士養成教育段階での「子育て支援力」育成のためには、保育者を含めた視点の獲得が必要→ひろば（サロン型）の取り組みが重要！そのためには保育養成課程の既存科目ではなく、「子育て支援演習」としての新規の通年科目を設置することが必要である。
7	地域を基盤としたソーシャルワーク実践を展開できる保育士養成プログラムの開発	長谷中崇志	2009		○			ゼミナール生と地域福祉研究受講生	**内容分析（KJ法）**	カテゴリー分析の結果、個別支援の理解と実践力、地域支援の理解と実践力、企画立案・運営力の3つが抽出された→地域社会における多様な主体との協働により、保育士養成課程において継続性のある実践的なソーシャルワーク教育を展開していくことが出来る可能性がある。ケースワーク、グループワーク、コミュニティーワークを中心としたソーシャルワークの基礎的知識・技術について体験を通して身に付けることができる。
8	子育て支援の実践力を高める保育者養成方法の研究（その2）－特に親と対話する力を高めるための教育方法の開発	中西利恵・大森雅人	2009		◎			学生7名	**※プロセスをみる**内容分析（学習シートの自己評価および活動の記録も含む）	適切でタイムリーな助言や指導を得ながら学習できる学習環境は、段階を追って親とのコミュニケーションを学習できる。 対話する力を高めるために有効な指導として個々の学生の特性と達成度に合わせた指導、具体的な学習が挙げられた。
9	「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（2）－サービスラーニングにおける学生のジャーナルの分析を中心に一	福井逸子・小栗正裕・瀧川光治	2009		◎			3名の学生	コードマトリック,**プロセスをみる内容分析**（縦軸の変化）	①子育て支援観のイメージが変化した ②保育所保育指針に示されている内容への気づき

表２．質・量的な調査を併用した研究

文献番号	タイトル	著者	年	何を材料としたか	誰を対象にしているか	分析方法		視点		結果
				質問紙調査		分析法	プレポスト比較の有無	心理的変化	子育て支援のコンピテンシー	
1	学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的変化といひろば自体の変化に関する考察（その2）	馬見塚珠生・竹之下典祥	2010	○	調査研究「子育て支援活動」を履修した2期生18名を経験群、履修しなかった学生17名を対象群として統計的手法を用いて比較検討を行った	t検定	○	○		全体では演習前後では有意な心理的変化はなかった。クラス間比較（1期生は有意な差が見られた）では有意な差が見られた。
				インタビュー	2期生5名	内容分析				カリキュラム上の制限により、学生自身に心理的変化をもたらす条件を等しく整えられず、学生の個人的力量に依拠する結果となったためと考える。
2	「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育－学生の変化と教育効果の評価方法について」	小松白梅学園短期大学・白梅学園大学　子育て広場GP委員会	2007	○	41名中、2回分の記録(記名式)がある35名分を分析対象とする	t検定	○		○	チェックリストによる分析 ① プラスの変化･･･Ⅳ支援する（3項目有意差あり）Ⅰ環境設定　Ⅱ関係を作る（2項目で有意差あり）成長を自覚していることがわかった。 ② 明確な変化なし･･･Ⅴ振り返るは、1項目のみ有意差あり、課題を知るは高度な内容であり、評価も低く、差もなかったものと思われる。
				記録		内容分析				記述内容の分析 実践を重ねる中で、学び・反省点・次回の課題等、内容に深まりが見られた。 学生の様子と記述内容から「企画・運営力」「多世代の人と協力し合い適切な援助を可能にする力量」の育ちが確認でき、チェックリストの項目との関連もある程度見出せた。
		小松・白梅学園短期大学・白梅学園大学　子育て広場GP委員会	2008	○	3回の調査すべてに回答した31名	f検定	○		○	学生はひろば実践を通して、参加者と関係を作り、「相手を受け入れ、やり取りを大切にしてかかわることができるようになったこと、ほかの学生と協力して積極的に参加できるようになったこと、自らの課題を意識して取り組むようになったことが明らかになった。担当者からの実感だけでなく、分析の結果から学生の実践力、省察力は確実に成長したと結論付けている。
				記録		内容分析				学生はひろば実践を通して、参加者と関係を作り、「相手を受け入れ、やり取りを大切にしてかかわることができるようになったこと、ほかの学生と協力して積極的に参加できるようになったこと、自らの課題を意識して取り組むようになったことが明らかになった。担当者からの実感だけでなく、分析の結果から学生の実践力、省察力は確実に成長したと結論付けている。

としたソーシャルワーク実践を展開できる保育士養成プログラムの開発」として，地域との協働による学生参加型子育て支援推進教育プログラムの質的分析を行った。そして，子育てサロンでの演習に参加した授業受講学生の1年間の「振り返り記録」についてKJ法によるカテゴリー分析を行った。その結果，個別支援の理解と実践力，地域支援の理解と実践力，企画立案・運営力の３つの学びが抽出されたと述べている。

2010年，福井ら[7]は「『子育て支援力』育成のための保育士養成教育に関する研究（3）－3年間の継続研究を通してモデルシラバスの提示を行うー」をテーマに，大学の近隣の保育所が運営する子育てひろばに参加した10名の学生を対象に，参加者の親子や子育て支援担当者とかかわった経験をエピソードとして記録の集積をもとに作成された振り返りシートを分析した。その結果，イベント型とひろば型においては，実践における学生の学びが違う。プログラムの有無，子育て支援保育士の存在の有無が，学生の学びの中身に違いをもたらしている。今後は，学生の「子育て支援力」育成のためには，理論的な学びだけでなく「親子遊び（イベント）型子育て支援活動」と「ひろば（サロン）型子育て支援活動」の両方を経験することが必要と述べている。保育士養成教育段階での「子育て支援力」育成のためには，保育者を含めた視点の獲得が必要であり，子育て支援の専門スタッフがいるひろば（サロン型）での取り組みが重要と述べている。そのためには保育者養成課程の既存科目ではなく，「子育て支援演習」としての新規の通年科目を設置することが必要であると指摘している。しかし，上記提案は，実践を通して検証したものではないため，実践を通して学生の学びがどうであったかを明らかにしなければならいとも述べている。さらに，授業に位置付けるのであれば，成績評価の基準が必要であり，記録用紙だけでは不十分であり，態度特性をいかに評価するかという課題が残ると指摘している。

2011年，荒木ら[8]は「保育者養成課程における子育て支援事業を通した学生の意識変容」をテーマに，親子広場に参加した保育学生1年38名を対象に，自由回答形式の調査を行い，断続的比較検討を行っている。自由回答はText miniing処理を行い，統計解析はＥxcel2007およびspssを使用した。前半期調査では「母親」「うれしかった」「子ども」に関する記述が多かったが，後半期は，「会話」次に「子ども」「うれしかった」の記述度数の順となり，観点の変化が見られたと述べている。このことから，母親とのコミュニケーションというプレッシャーを克服し冷静に子どもが見られるようになって行くことが示唆されたと述べている。前半期と後半期では「会話」および「個名」が優位な向上を示した。徐々に冷静に対応することで具体的な「会話」や「個名」について意識できるようになっていくことが示されたと述べている。

2014年，平松ら[9]は，「保育者養成校で保育士の専門性を高める試み」をテーマに，NPの一時保育スタッフとして，乳幼児を3ヶ月間にわたり担当した体験を自己省察した学生の「振り返りシート」の分析を行った。その結果，身近なキャンパスで実践するメリットが見られた。そして，一人ひとりの成長に気付いたり母親にかわる心のよりどころになる経験をしたり，ありのままの保護者を理解すること等の学びがあったと述べている。さらに，今後は実習の指導を重ねるだけでなく，具体的な場を設け自己省察することが大切だと述べている。

② プロセス分析

次に，プロセスに注目した研究を見てみる。2009年，福井ら[10]は，「『子育て支援力』育成のための保育士養成教育に関する研究－サービスラーニングにおける学生のジャーナルの分析を中心に－」をテーマに研究を行っている。本研究では，子育て支援力を明確にした上で，保育園内の子育て支援ひろばで関与観察した3名の学生のジャーナル（日誌）と振り返りについて，コード・マトリックによるデーター分析を行った。その結果，養成校で行われる学生主体のイベント実施型の子育て支援活動で体験的に学ぶ「子育て支援観」とは違う観点で，時間の流れと共に学生の「子育て支援観」の変容がもたらされたとある。

2009年，中西ら[11]は，子育て支援の実践プログラムと学習環境との教育効果を明らかにするために，学生7名の活動の様子と自己評価である学習シート（自由記述あり）の1回目から6回目までの分析を行った。実践プログラムとして，学生主導型，教育や子育て支援スタッフ主導型，ノンプログラム型など3つの活動スタイルに加え，母子分離の活動等提案し，親との対話状況の変化等から教育効果を検証している。その結果，親と対話する機会がほとんどない学生にとっては，段階をおって親とコミュニケーションできる学習環境や適切でタイムリーな助言や指導を得ながら学習できる環境は，対話する力を高めるために有効であることが分かった。課題としては，「親育ち」の支援の効果の検証とよりよい教育方法の構築が挙げられていた。

2011年，多田ら[12]は「『子育て支援に関する力量形成を目指した保育者養成の試み－子育て広場『あいあい』を通して学生が体感した語りから考察する』をテーマに，授業履修者の子育て広場体験の反省に関する記録や語りを分析した。結果，自分自身の学びを価値あるものとして必要感を持って会得していこうとする姿勢が明確になったと述べている。また，保育の価値の質が少しずつ変化，活動内容に関する共通理解の必要性に気付いていったと述べている。

２）量的，質的調査を併用した研究

小松ら[13]は，2007年に「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育－学生の変化と教育効果の評価方法につい

て」をテーマに，授業「子育て広場特論」の教育効果測定の結果を報告している。子育て支援活動参加者全員にコンピテンシーチェックリスト（以下，チェックリスト）を用いて，1回目と4回目の実践後にt検定を行った。1．環境構成　2．関係をつくる　3．課題を知る　4支援する　5振り返る･学ぶ　各項目５つの下位項目からなり５段階（計25項）の分析対象とし，対応のあるt検定を実施した。ここでは，41名中，2回分の記録（記名式）がある35名分を分析対象としている。その結果，支援する内容等で有意差が確認された。具体的には，チェックリストによる量的調査では，プラスの変化があったもの，「支援する」の下位3項目に有意差あり，「環境設定」「関係を作る」の下位2項目で有意差ありが見られ，学生は成長を自覚していることがわかった。明確な変化がなかったものは，「振り返る」の下位1項目のみ有意差あり，「課題を知る」は高度な内容であり，評価も低く，差もなかったと述べている。

小松ら[13]は，同時に，記述内容の分析も行っており，実践を重ねる中で，学び・反省点・次回の課題等，内容に深まりが見られたことを報告している。学生の様子と記述内容から「企画･運営力」「多世代の人と協力し合い適切な援助を可能にする力量」の育ちが確認でき，チェックリストの項目との関連もある程度見出せたと述べている。課題については，学生の育ちのアセスメントの方法を一層科学的にしていくことであり，どのように育ったか理論的検討を行い，メカニズムを一層明確にすることと述べている。さらに，2008年には，子育て支援活動参加者全員にチェックリストを用いて分散分析を行った[14]。その結果，25項目中1回目と2回目で差が見られたものは4項目だった。1回目と3回目で差が見られたものは第2回目でも見られた4項目を含む15項目であった。「環境を設定する」は1項目，「関係を作る」「課題を知る」は3項目，「支援する」「振り返る・学び」は4項目であった。この結果から，学生はひろば実践を通して，参加者と関係を作り，相手を受け入れ，やり取りを大切にしてかかわることができるようになったこと，ほかの学生と協力して積極的に参加できるようになったこと，自らの課題を意識して取り組むようになったことが明らかになった。担当者からの実感だけでなく，分析の結果から学生の実践力，省察力は確実に成長したと結論付けている。

馬見塚ら[15]は，子育て支援活動を通じて学生自身に心理的変化が生じたのかについて調査を行うとともに，授業が子育て支援者を育成する上でどのような意義があったのかについても検討している。具体的には，対児感情尺度，子ども・子育てに関する意識尺度等について，子育て支援活動の履修有り無し群でt検定を行った結果，有意な差はなかったと述べている。また，年度をまたがって行ったクラス比較調査は，学生自身に心理的変化をもたらす条件を等しく整えられず学生の個人的力量に依拠する結果となったと述べている。調査の課題については，一定の条件整備が必要である。具体的には①連続5回以上のひろば参加で複数の広場体験が望まれる。ひろばに入るにあたってPDCAサイクルを意識した設定保育を学生自身が協力して企画し，親子との相互交流を繰返しながら実践する。その際の具体的な関わりのポイント等を予め教示したりスタッフとの交流を通じて修正したりすることが挙げられていた。

5．考察

（1）質的調査の意義と限界

質的な研究では，インタビューデーターや記録等を用いて，どのような学びが見られたか最終的にとりまとめ意味内容ごとにカテゴリー化したりコード化したりする内容分析が多く見られた。その結果，全体として何を学んでいるのかを抽出し，学びの条件としてどのような学習環境が必要なのか等が考察されていた。また，インタビューデーターや記録等のプロセスに注目して，一人一人の実践過程を分析しているものも見られた。これらの研究からは，変容のプロセスやその背景となっている要因が明らかにされていた。具体的には，竹之下ら[5]，福井ら[10]中西ら[11]により「有能で理解あるひろばスタッフの介在や座学と実習体験の両輪の学習スタイル」「時間の経過と共に『子育て支援観』の変容がもたらされた」や「適切でタイムリーな助言や指導を得ることや段階を追って親とのコミュニケーションできる学習環境」などが挙げられていた。このことから，質的な研究において，特にプロセスに注目して分析することは，教育効果を上げる実践の場や条件の検討が可能となり重要な視点と考える。つまり，子育て支援実習等の条件整備の検討につながる評価であることが推測される。一方で，今回レビューした質的研究では，子育て支援力と捉えられる「何」が「どのように」変化したかという，「何」に当たる「子育て支援力の指標」となる「育成したい能力や技術等」を明確かつ具体的に示したものはほとんど見当たらなかった。福井ら[9]は，子育て支援実習等を授業に位置付けるのであれば成績評価の基準が必要であり，記録等による評価では不十分であると指摘している。さらに，態度特性をいかに評価するかということが課題であるとも述べている。

（2）実習前後の量的調査の必要性

小松ら[14]は，質・量の両方の視点で子育て支援活動の評価を行い，数量からも記述の内容分析からも子育て支援への取り組みによるある一定の成果があったことを実証している。小松ら[14]は，福井らが指摘する成績評価の基準や行動特性と捉えることができるチェックリストを作成して，子育て支援活動に参加した全員が子育て支援に関する自己評価を行っている。評価のタイミングは，子育て支援

活動の1回目と4回目である。ここで使用されたチェックリストは，子育て支援者コンピテンシー研究会が作成した「子育て支援者のコンピテンシーリストVer.3ひろばスタッフ基礎編」を学生用に作成したものである。コンピテンシーリストは，現在，地域子育て支援拠点等において子育て支援者が自身の実践を振り返る視点として用いられており，支援の質を担保することにおいても重要な役割を果たしている[16]。研究の結果からは，具体的に明確に教育効果が上がっている内容を実証することを可能にしている。つまり，子育て支援活動参加によって，子育て支援力である技術や能力がプラスに変化していることを統計的に実証している。小松らは，さらに次の年には，自己評価の回数を2回から3回に増やし，分散分析による評価を行った。そして，担当者だけの実感だけでなく，分析の結果から，数量的にも学生の成長を表すことができたと述べている。このように，教育効果の有無を実証するには，経験する前後において，もしくは回数の増減によって具体的にどのように数値が変動したかを見ていく必要があると考える。

（3）尺度を用いた効果測定の必要性

どの研究も，方向性としては子育て支援に関わる学生の力量を高めることを目指していることがわかる。しかし，現段階では，保育者養成課程で身につけることが期待される子育て支援の能力や技術などの具体的な尺度が示されていない。そのことも反映されてか，研究の目的や方法は様々であった。筆者は，前回の研究[17]で，「子育て支援力」がどのように捉えられているのかについて先行研究をレビューした。その結果，大きく３つに整理された。一つが，親とのコミュニケーション力を基本とした子育ておよび親育ちへの対応[18]である。二つが，保育者としての基本的な姿勢等を基盤とし子どもを保育する「保育実践力」および「親の子育てを支援する力」[19]と捉えているものであった。三つが，ソーシャルワーク的な視点を持ち，それを展開できる力である。このように様々に捉えられているとともに，具体的な尺度を用いて実践しているものはわずかであった。

そこで，子育て支援力育成の取り組みの評価にあたっては，まず保育者養成課程で育つことが期待される子育て支援力を明確かつ具体的に示す必要があると考える。その上で，実践の前後における数量等の変化等から取り組みの成果を実証することが求められるのではないか考える。さらに，量的な研究では明らかにしにくい「何を経験しているかというプロセス」や「なぜ学びが促進されたかの要因」などを質的な方法で明確にすることにより，子育て支援実習等における教育効果を上げる学習環境整備や喫緊の課題である保育者養成課程における子育て支援力育成のためのカリキュラム検討につながっていくのではないかと考える。

文献

1）厚生労働省：保育所保育指針解説書．フレーベル館，2008

2）文部科学省：幼稚園教育要領解説. フレーベル館, 2008

3）福井逸子，小栗正裕，瀧川光治：「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（1）－短期大学へのアンケート調査の分析を通して北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要1，135-150.2008

4）橘知里，小原敏郎：子育て支援活動での学生のかかわりの変容.日本保育学会第65回大会発表要旨集. 2012

5）竹之下典祥，馬見塚珠生：学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的変化の質的調査研究.京都文教短期大学研究紀要50，70-81，2011

6）長谷中崇志：地域を基盤としたソーシャルワーク実践を展開できる保育士養成プログラムの開発．名古屋柳城短期大学研究紀要31．145-151，2009

7）福井逸子，小栗正裕，柴田智世，瀧川光治：「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（３）‐3年間の継続研究を通してモデルシラバスの提示を行う‐．北陸学院大学・北陸学院大学短期大学研究紀要3，79-90，2010

8）荒木満紀，田川緑，伊藤雅子，今井正江，石井友光：保育者養成課程における子育て支援事業を通した学生の意識変容．帝京平成大学紀要第22.2，1-11，2011

9）平松紀代子:保育者養成校で保育士の専門性を高める試み.京都聖母女学院短期大学研究紀要43，45-58，2014

10）福井逸子，小栗正裕，瀧川光治：「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究－サービスラーニングにおける学生のジャーナルの分析を中心に－．北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第2，65-76，2009

11）中西利恵，大森雅人：子育て支援の実践力を高める保育者養成方法の研究（その２）-特に親と対話する力を高めるための教育方法の開発．相愛大学研究論集25，169-192，2009

12）多田琴子，三宅茂夫：「子育て支援」に関する力量形成を目指した保育者養成の試みー子育て広場「あいあい」を通して学生が体感した語りから考察する.神戸女子大学文学部紀要44，117-137，2011

13）小松歩，佐久間路子，瀧口優，草野篤子，金田利子，佐々加代子：子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育-学生の変化と教育効果の評価方法について‐．白梅学園短期大学・白梅学園大学子育て広場GP委員会「大学における地域と学生をつなぐ子育て広場」報告書. 白梅学園短期大学・白梅学園大学子育て広場GP委員会，214-216，2009

14）白梅学園大学子育て広場GP委員会：「大学における地

域と学生をつなぐ子育て広場」報告書.104-107，2009
15）馬見塚珠生，竹之下典祥：学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的変化とひろば自体の変化に関する考察（その２）.京都文教短期大学研究紀要49, 32-49, 2010
16）子育て支援者コンピテンシー研究会：育つ・つながる子育て支援．具体的な技術・態度を身に付つける32のリスト．チャイルド社．2013
17）三好年江：保育者養成課程における子育て支援力育成の取組み - 先行研究から見た「子育て支援力」の捉え方 - ．日本保育学会論文集．2016
18）中西利恵，大森雅人，原口富美子：子育て支援の実践力を高める保育者養成方法の研究（その１）実践プログラム作成に向けた教育効果の検討から，相愛大学研究論集24，215-239，2008
19）前掲３）